

---

# こころの

揺夢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

こころの

### 【Nコード】

N8908C

### 【作者名】

揺夢

### 【あらすじ】

桜も散り、五月の半ばになり、特徴が緑が多いだけ、偏差値も並の少し上な高校、都立深楼高校の新生入生達のクラスの中では、友達ができ、仲の良い者同士集まりグループなどができた中、根本光一は御浜遙香に恋をしていたが話し掛けられずにいた、そんなある日の帰り

## 初めての会話

『絶好のチャンス!!』

高校生、根岸 光一の好きな女の子がふと見た先の裏庭で花に水をあげていた。

全力疾走でそこに向かい、必死さを悟られないように死角で息を整えてから、意を決して声を掛けた

「や、やあ御浜さん、花好きなの？」

『やべえ少し噛んだ』

振り向くと御浜 遙香は一言も話さずに光一の顔をじっと見続けた

『……俺、なんかしたかなあ？』

『……誰、だっけ？見た気がするし、クラスメイトかな？……まあ、聞けばいつか』

「うん、君は？」

「え？俺？俺も嫌いじゃないかな」

「違う、名前」

「ええ」

いきなり想定外の話の流れになり戸惑いながらも必死に考えた。

『花の種類なんか知らねえよ……ええとお……』

「向日葵が好きかな」

『まあおかしくはないだろ』

「違うよ、君の名前何？」

「え？」

好きな子に名前すら覚えてもらえてないとは流石にショックも隠し切れずに明らかに落ち込んでいるが、それを全く意に介さない様子で「君の名前だよ？……嫌ならいいけど」

「いやいや嫌じゃないよ!!俺は根岸光一」  
『きつともの覚えの悪い子なんだよな、うん、絶対そうだ!!』

## 微妙な空気

聞くとすぐに近くにあった木の枝を拾い地面にガリガリと平仮名で

『ねもとこーいち』と書いた

「ねもと、こーいち」

「覚えてくれた？」

「うん、多分」

「そっかありがと」

「うん、こーいちね」

「そうそう、俺なんて呼べばいいかな？」

「なんでもいいや」

そう言うとき遙香は花の方に向き直りまた花に水をあげ始めた、光一の頭の中の葛藤など知らずに。

『んゝゝゝ呼び捨て？さすがにハズいし周りの目もあるしな、じやさん付け？なんか折角のチャンスなのに勿体ないしゝゝゝうゝんゝゝゝゝ』

「あ」

考え込んでいた光一は驚き振り向いた。

「どうしたの！？」

「水なくなっちゃった」

遙香は子供が使えなくなつた玩具を見るような目でジョウロを見ていた。

「水持つて来る？」

その場にジョウロを置きながら

「いいや」

「え？」

『神様！これはもしかしたら俺との会話に集中してくれるってサインですか！？』

手を握り合わせて空を仰いだ。

ガリガリガリ

浮かれている光一をよそに遙香はさっきの木の枝を拾って小さな声で歌いながら地面に絵を描いていた。

「どくしておおなかあがへえるのおかなあゝ」

光一の耳に遙香の声が入った。

「ん？」『もしかして壮大な勘違い？やっぱ俺相手にされてない？

いや、俺はめげない！！』

「何描いてるの？」

「ん？晩ご飯何がいいかなって」

「え？晩ご飯自分で作ってるの？」

「んゝん、リクエストするの」

「へえゝ、リクエスト聞くなんて優しいお母さんだね」

「ん？うちはお母さんじゃないよ？」

## 意外な流れ

『は、母親じゃない！？ヤバい、俺もしや地雷踏んじやった！？』

「え、ええ」とだったら誰が作ってくれるの？」

「あそこに居るお姉ちゃんだよ」

指差した先には柔道場。

だが柔道場とは名ばかりで空手や剣道など格闘技系の部活は全てそこで活動を行なっている。

「もしかしてお姉さんって空手とかやってたりするの？」

「違うよ、合気道やってるの」

「あ、合気道！？」

『合気道ってもしかやあいつから聞いたあの？』

（回想）

「光一、お前は部活とか入らないの？」

「まだ考え中、お前は空手部だっけ？たしかあそこそれなりに強かったよな」

「そう、それなりに強い筈なんだよ、なあ？」

「いや、俺に聞くな、お前空手部だろ？アホ」

「アホじゃねえよ！！聞けよ！？うちの空手部の今の目標は大会制覇じゃなくて合気道同好会に勝つことなんだぞ！？今強いって言われてもわかんねえよ」

この後一時間近く愚痴が続いた・・・

「うん、スパゲティにしてみらお」

『ハッそうだった今はそんな場合じゃねえ！お姉さんなんか関係ない！！』

「スパゲティ美味しいよね、どんなの好き？」

「ん、ミートソース」

「ああミートソース美味しいよねえ、俺も好きだよ」

「へえ、一緒だね、食べたい？」

「うん、食いたいな最近食ってないし」

「わかった、いっぱい作ってって頼む」

「え？もしかしてそれって御浜さんちで晩飯食っていいってこと？」

「嫌？ならいいや」

「いえ、是非行かせてください！！」

『よっしゃ！！もしかしてめっちゃ脈アリだったりするよなコレ！  
』

「じゃあ来たら言う、そろそろだから待ってて」

「うん、そついや家どこ辺りなの？」

「あの辺」

そつ言っ指を向けた方は学校を出て、坂を上ったらすぐの高級住宅街だった。

## 姉、登場

「・・・もしや御浜さんちつてもものすごいお金持ちだったりするよね？」

「そうでもない、と思うよ？」

「いやでもあそこ高級住宅街だよ？」

「・・・じゃあお金持ち？」

「多分ね、てかななことどうでもいいか」

「うん、携帯貸してくれない？」

「え？」

いきなり意図のわからない要求に混乱しながらも言われるがまま渡してしまった。

「ありがと、ええ」と・・・「一応の礼を言つと携帯を左手で持ちながら右手の人差し指でボタンをぎこちなく押し始めた

「ん？何この変なの」

『え！？なんかあつた！？』

「ちよつ！貸して！！」

強引に遙香の手から携帯を取り上げた。

「おつとつと、あれ？」

ズルッポテッ

その勢い余つて遙香は足を滑らせて尻餅をついた。

それを見ていた一人の影が動いた。

「あ、ごめん、うおッ！？」

立たせようと差し出した手をいきなり後ろから取られたかと思つたらいつの間にか俯せで地面に倒れていた。

「私の遙香に何してんの？キミ」

親の仇敵を目の前に行っているのかと勘違い出来る程に冷たい口調だ

った。

「は？え？？」

『ええつと？・・・何、この状況？？』

「お姉ちゃん、その人友達、悪くない」

「ええッ！？どゆこと！？」

パツと放したその時の口調は先ほどの冷たさなど微塵も感じられない程穏やかな口調になっていた。

「ちよつとした事故だから」

「ホント？」

「うん」

「そう　ならよかったの、ごめんなさいね？大丈夫？キミ」

展開の早さに付いて行けず上の空ながらも

「大丈夫・・・です」

「ならよかった、姉の香織です、よろしく」

向けられた手をその場の流れで握ってしまう光一だった。

## 帰宅へ

「よ、よろしくお願いします」

「そんなに堅苦しい言い方しないでいいよ？そつえば名前は？」

「え、えつと、ねもと、です」

「根本くんね、改めてよろしく根本くん」

そつ言つて今度は握手の為に差し出された右手とそのときの笑顔は今までの悪い印象を払拭して余りある天使の様な笑顔だった。

「あ、はい、よろしくです、香織さん」

ギョッ

思い出したように遙香が口を開いた

「そついえばこーいちも家で晩ご飯食べていい？」

『呼び捨てなのは少し気になるけど』

「・・・まあいいわ、色々と話したいこともあるし」

優しい言葉とは裏腹に何故か最初の冷たい印象が見え隠れしていた。

「あ、ありがとうございます」

「何が食べたい？遙香」

「スパゲティがいい」

「んゝ・・・じゃあ麺買うから帰りにお店寄つて行こ？」

「うん」「いいよね？根本くん？」

「あ、俺は全然大丈夫です！」

「よかつた、じゃあ荷物取つて来るから待つてて」

そつ言つとすぐに小走りで荷物を取りに行った、ちなみに格好は練習のそのまま帰るようだ。

『なんか、すつげえゝ姉さんだなあ、でもこんなチャンスつて俺運良いな』

ほんの5分くらいで香織は戻つて来た。

「じゃ、行こうか」

「うん」

「あ、はい」

「買うのは野菜と挽き肉だけだから、寄る店は二つだね」

「え？スーパーじゃないんですか？」

「え？産地わからないのって怖くない？農薬も体に悪そうだし、根本くん意外と豪快だね」

「いやゝ俺が普通だと思いますけど…」

正論であろう筈の光一の言葉に驚いた様子で。

「そうなんだ」

「へえゝ」

「そろそろ行こ？お腹空いた」

「まあそうね、行きましょ」

「ああ、はい」

光一は二人に付いて行きながらボーっとこれからのことを考えていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8908c/>

---

こころの

2010年12月22日02時46分発行